

沖縄における南米系日系人の求職過程

—移民の社会適応と社会移動に対する社会関係資本に着目して—

琉球大学 崎濱佳代

1 目的

本報告は、前回調査（2002年）当時から13年経過し、沖縄社会に定着した南米系日系人の「社会的排除を乗り越えホスト社会に働きかける」主体としての経験に焦点を当てて分析するものである。日本におけるニューカマーとしての南米系日系人の研究においては、社会的排除を乗り越えるときに家族や日系人仲間（エスニック・ネットワーク）が大きな支えとなるという知見は多いが、本論文ではホスト社会に南米系日系人を接続し、就業機会や情報をもたらす架橋的社会関係資本に着目している。

2 方法

以上の課題を明らかにするために、まず2002年度の量的調査のデータから沖縄社会における南米系日系人の社会的包摂／排除の現況を明らかにする。次に2015年度の質的調査のデータの分析を加えて、沖縄社会における南米系日系人の社会的包摂、具体的に言えばその社会適応と社会移動に対する社会関係資本の機能に着目して論ずる。

3 結果

2002年度の調査時点における南米系日系人の包摂がはっきりと認められるのは社会的活動の側面だけである。雇用市場では「言葉」の違いのために不利になりがちである。そのかわり、自営業を起こして生計を立てる傾向にある。分析を行う中で浮かび上がってきたのは、私的ネットワークの重要性である。職業あっせんや教育などにおいて、公的なシステムは日本語能力や日本社会への同化を強く求めているが、2015年度調査の対象者は、家族・親族・友人（同僚含む）といった私的ネットワークを活用して職を得、居場所を開拓してきた。日本語能力や文化的背景の違いがハンディキャップになりやすい第3次産業が中心の沖縄社会で「わからないこと（日本語・慣習など）があっても笑って許してもらえる、手伝ってもらえる」職場環境を得られるのも、紹介者の信用を社会関係資本として活用しているためだと考えられる。このような環境下で、対象者は周りとは異なる自文化をメリットとして肯定的に位置づける傾向がみられた。

4 結論

以上から、沖縄県在住の南米系日系人は日系人仲間とホスト社会との双方に信頼できる社会関係資本を築いているといえよう。顔の見えるネットワークを通じた求職は、彼らの異質性を了解した上で受け入れる職場環境につながっている。沖縄の社会関係においては公式の社会関係よりも非公式の私的なネットワークを重視するという傾向が指摘されており、多文化化の進まない公的セクターを私的な社会関係資本が補って南米系日系人の社会適応や社会上昇を助けているという構造が見いだせる。また、南米系日系人をホスト社会に接続する社会関係資本として「沖縄の親戚」が機能している点は、日本における南米系日系人の研究の中でも独創的な知見である。

文献

崎濱佳代「沖縄における南米系日系人の求職過程—移民の社会適応と社会移動に対する社会関係資本に着目して—」『移民研究』第14号、pp95-123、2018年。